

2025年10月19日 主日礼拝メッセージ

聖書:ホセア書11章1~7節

説教:わたしは彼を愛する

はじめに

北イスラエルの人であったホセアは、紀元前760年頃に預言者として召され、さあこれから新たな働きに就くのだと意気込んでいたとき、主は姦淫の女であるゴメルを妻にしなさいと告げました。どうしてか。主の説明はこうでした。「この国は主に背を向けて、淫行にふけっているからだ。」悪いことをしているのはイスラエルの人々です。自分ではない。なんとも理不尽な話です。ホセアは、外では神のことばを語りながら、家に帰れば罪だらけの家族のことで悩んでいく。そのようにしてホセアもイスラエルと一緒に苦しむのだと言われました。

今日開いている所には、エフライムの罪について厳しいことばが並んでいます。一見どこにも、救いのみことばがないかのように見えます。旧約の神は恐ろしく新約の神、イエスはやさしく感じられて全然別の神ではないかと言われることがあります。しかしそんなことはないはずです。旧約も新約もともに一つの聖書、同じ神です。今日開いている所にもそのことが書かれています。ここにも実はイエス・キリストがおられ、救いのみことばがあります。それはどのようなことか、そして私たちとどのようなつながりがあるのかを見てまいりましょう。

1 神

1) わたしの子を呼び出した

1節。「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、エジプトからわたしの子を呼び出した。」

ここで「わたしの子」と呼んでいるのはイスラエルのこと、神はイスラエルのことをまるでご自分の子ども、一番大切な長子としてご覧になります。これは突然ホセアのときに言いだしたことではありません。モーセがエジプトに遣わされたときにすでに、「イスラエルはわたしの子」であると言われていました。主はイスラエルのことをずっと昔から変わらずに自分の子どもとしてご覧になっていました。

2) 腕に抱き歩くことを教えた

そんなイスラエルを神がどのように愛したか。ここではさまざまなことばで表現されています。たとえば3節前半。「このわたしがエフライムに歩くことを教え、彼らを腕に抱いたのだ。」ヤコブの

時代に起きた大きな飢饉がきっかけで、イスラエルがエジプトの地に移り住むようになりました。今で言う移民ということです。彼らは、ユダヤ人独特のコミュニティをつくり安い賃金で働くので、どうしても地元の人たちから煙たがれ、何かといやがらせを受けます。あるときは男の子が生まれたら殺せという命令が出るくらい徹底的に差別されていく。そんなときイスラエルは主に叫びました。そこで神はモーセを遣わし、エジプトから脱出させていく。そのとき神の目には、イスラエルはまるで幼子のように見えたというのです。着の身着のままでエジプトから出て来たのはいいけれど、さてこれからどうするか。民全体をまとめていく法律もなければ組織もない。主をどのように礼拝するか知識もない。ないない尽くします。それで主は、子どもを腕に抱いて歩き方を教えるかのようにして、十の戒めを与え、律法を教え、幕屋のつくりかたを指導していった。

3) 癒やし食べさせた

そればかりではない。エジプトを脱出してすぐに問題になったのは飲み水と食料のことでした。荒野ですからそんなものはどこにもない。そこで主は天からマナを降らせて、岩から水を湧き出させるという奇跡を起こして飲むもの、食べる物を与えられました。4節後半にあるとおりです。「わたしは彼らにとってあごの口籠を外す者のようになり、彼らに手を伸ばして食べさせてきた。」口籠というのは、馬や牛を畑で働かせるときに、口に籠のようなものをかぶせて畑の作物を食べないようにさせるものです。食べたいだけ食べられるように神はイスラエルに与えられました。

2 イスラエル

1) 律法を破りバアルを拝んだ

このようにして神は愛を示してくださいました。が、イスラエルはどうしたか。2節にあるとおりです。「彼らは、呼べば呼ぶほどますます離れて行き、もろもろのバアルにいけにえを献げて、刻んだ像に犠牲を供えた。」

ご存じのようにモーセの十戒の最初の二つはこうです。「あなたには、わたし以外に、ほかの神々があつてはならない。あなたは自分のために偶像を造つてはならない。(中略) それらを拝んではな

らない。それらに仕えはならない。」最近一丁目I番地ということばが使われます。まさに律法の一丁目I番地の最も大切な戒めをイスラエルはことごとく破ってしまいます。

2) 剣とはかりごとで倒れる

律法を知っていたのにどうして簡単にバアル拝むようになったのか、不思議に思われるかもしれません。エジプトを脱出して四十年後に約束の地に入ったのは荒野で成長した第二世代です。彼らは偶像というものを見たことがない。それがカナンの地に入って初めてバアルの形を刻んだ偶像に出でます。なにも免疫がありませんから、非常に魅力的に見えて取り憑かれてしまうわけです。日本でも国宝と呼ばれる仏像やお寺があつて、芸術品として鑑賞する分には何も問題ない。ところがそれを神や仏だと信じて拝むということになると話は別です。というのは、どの神を信じるかによって国が立つか倒れるかが決まるほど大きな違いを生み出してしまうからです。北イスラエルはバアルの神々を拝んだ結果、アッシャリアの軍隊が城壁に囲まれた町を略奪するために門を閉ざしているかんぬきを壊して扉を開け、剣を振るって荒らしていく。そして北イスラエルは滅ぼされてしまいます。これがバアルを拝んだ結果でした。

3 イエス・キリストとイスラエル

1) 一人のかしらを立てる（ホセア1章11節）

ということは、主がホセアを預言者として召したことは無駄だったのでしょうか。ここだけ見ればそのように見えます。しかし、主がなさることに失敗とか無駄ということはありません。確かにイスラエルは主に背き、主に立ち返ることを拒みました。でも1章11節でこんなみことばあったのを思い出してください。「ユダの人々とイスラエルの人々は 一つに集められ、一人のかしらを立てて その地から登ってくる。まことに、イズレエルの日は大いなるものとなる。」

この「一人のかしら」とはだれか。ホセアの時代からおよそ760年後に来られた神のひとり子であるイエス・キリストを指します。ということは、ホセアはこんなことを語っていたことになる。イスラエルは主のみことばに逆らって失敗した。けれどもイエス・キリストはイスラエルに代わって完全にみことばに従い、律法の要求を完全に成し遂げた。旧約のイスラエルとイエス・キリストにはこんな関係があるのでということです。旧約と新約はこのようにつながっています。

2) わたしの子を呼び出した（マタイ2章15節）

二つ具体例を挙げましょう。ヘロデが、幼いイエスを殺そうとして探し回っていたときのことです。ヨセフは、ヘロデの手を逃れるために幼子マリアを連れてエジプトに逃れ、ヘロデが死ぬまでエジプトに滞在します。そこだけ見ればただそれだけですが、実は重要な意味がありました。マタイ2章15節にこうあります。「これは、主が預言者を通して、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と語られたことが成就するためであつた。」

イスラエルは、呼べば呼ぶほど主から離れてしまい、失敗しました。でも、エジプトに逃れたイエスは、やがてご自分の故郷であるカナンの地に戻り、イスラエルにできなかつたことを代わりに成し遂げられました。イスラエルとイエス・キリストはこのように結びついています。

3) わたしは彼を愛する（マタイ3章17節）

もう一箇所例を挙げましょう。11章1節の「わたしは彼を愛し」というところです。ここで彼というのはイスラエルです。しかしこのイスラエルは、主を捨ててほかの神々を拝んで淫行にふけり、主の愛を踏みにじり、失敗しました。ところが、イスラエルに代わってこんどはイエス・キリストがこれを成し遂げます。イエスがヨルダン川で洗礼を受けられ、水から上がったとき天が開けて聖霊が鳩のように降り、こんな声が聞こえきました。マタイ3章17節。「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」ホセア書でイスラエルに語られた同じみことばが、イエス・キリストにも語られる。こうしてイスラエルとイエス・キリストが結びついていることがわかるでしょう。

3) 罪ある者を救うために

いま、イスラエルにはできなかつたことを、イエス・キリストが代わりに成し遂げてくださったことを見ました。このことは私たちとどのようなつながりがあるのか。最後に考えます。

ホセア書に書かれているイスラエルは他人事ではありません。罪人である私たちの姿そのものです。私たちは、いのちと食べ物を与えて下さつた方、腕に抱いて歩き方を教えてくださつた方を忘れてしまい、人の手で造った偶像をありがたいと言ひながら拝んでいました。平和な時は神はいないと言い張り、困ったことが起きると神は意地悪だ

と勝手なことを言っていました。それが私たちです。それでも神は私たちを見捨てません。

私たちは神の律法を守ることができません。けれどもイエス・キリストが代わりに成し遂げてくださいました。私は失敗した者ですと告白しこの方を信じるならば、私たちは神の子どもとされ、永遠のいのちを与えてくださる。神はこの救いの恵みを与えようと今も熱心に働いておられます。

この方こそまことの救い主ですと証ししながら、またこの一週間を歩んでまいります。

